からしだね

2019年7月号
(551号)

キリストの受難 カトリック池田教会
主任：ノノイ・プラザ神父
住所： 〒563-0041　池田市満寿美町9－26
TEL ： 072-751-2400　FAX：072-753-4624
URL(ホームページ)：http://www.ne.jp/asahi/catholic/ikeda/church/

本号の記事の主題など

第53回「世界広報の日」教皇メッセージ
報告 納骨室認可完了
大人の日曜学校だより　５月２６日
みんなの談話室
　ドレミの会は箱舟
　「東条湖の家」の店で
　ジャン・バニエの本
　教皇フランシスコと死刑廃止
　短歌二首
　サイコロの会で大道芸
地区委員会から
年間カレンダーに追加された行事予定など

第53回「世界広報の日」教皇メッセージ(注1)

バチカンより、2019年1月24日聖フランシスコ・サレジオの記念日にて。フランシスコ

親愛なる兄弟姉妹の皆さん

インターネットが用いられるようになった当初から、教会はつねに、人と人との出会いと、あらゆる人の間の連帯のために役立つその活用を促進してきました。このメッセージを通してわたしが皆さんに再度お願いしたいことは、わたしたちが互いにかかわり合う存在であることの根拠と重要性についてよく考え、現代のコミュニケーションが広範な問題を抱える中で、孤独でいたくないという人間の思いに、改めて目を向けることです。

「ネットワーク」と「共同体」の隠喩

今日のメディア環境は、日常生活の領域と区別できないほど広がっています。ネットワークは現代の資源です。それは、過去には考えも及ばなかった、知識とかかわり合いの源です。しかし多くの専門家が明らかにしているように、コンテンツの作成、流布、活用のプロセスにテクノロジーがもたらした著しい変化には、世界規模での正確な情報の検索や共有を脅かすリスクも伴います。インターネットが知識にアクセスする途方もない可能性を示すのであれば、それが、信頼喪失を頻繁に招くことになる、事実や人間関係に関する偽情報や、ある目的に基づく意図的な曲解にもっともさらされる場の一つであることも確かです。

ソーシャル・ネットワークは、一方ではわたしたちがより密接に結びつき、互いを認め、助け合うために役立っていますが、他方では、政治的、経済的な利益のために、個人とその権利を尊重しない個人情報の不正操作に利用されていることも認識すべきです。統計によると若者の四人に一人がネット上のいじめに巻き込まれています(2.)。

こうした複雑な状況の中で、インターネットの肯定的な可能性を再発見するためには、当初その根底にあった、ネット（網）というものの隠喩についての考察へと立ち戻ることが有益でしょう。ネットのイメージは、中心も階層的構造も縦型組織もなくとも安定している、多数の線と交点を思い起こさせます。ネットワークは、すべての構成要素が共にかかわることによって機能します。

人類学的な観点に立ち戻ると、ネットワークの隠喩は、共同体というもう一つの重要なイメージを思い起こさせます。共同体は、団結して連帯するほど、また信頼によって生き生きとし、共通の目的を追い求めるほど、いっそう強められます。連帯のネットワークとしての共同体は、責任をもって発言することに基づく相互の傾聴と対話を必要とします。

だれの目にも明らかなように、現状においては、ソーシャル・ネットワーク・コミュニティは必ずしも共同体と同義ではありません。このコミュニティは、最良の状態にあるならば団結と連帯のあかしとなりますが、大抵は、同じ関心や話題という弱いきずなによって認識し合う、個人の集合体にすぎません。しかも、ソーシャルウェブ上のアイデンティティは、ほとんどの場合、他者や部外者との対比に基づいています。つまり、結びつけることではなく、分け隔てることによって自己を定義しており、それにより疑いを生じさせ、あらゆる種類の偏見（民族、性、宗教などによる）を噴出させているのです。こうした傾向により、異質な存在を排除するグループが勢いを増し、歯止めの利かない個人主義がデジタル環境内にも広がり、憎しみの連鎖に至ることさえあります。このように、世界への窓（ウインドウ）となるべきものが、自己陶酔を誇示するショーウインドウになっています。

ネットワークは他者との出会いを促す機会となりますが、わなにはめる蜘蛛の巣のように、わたしたちをさらに孤立させることもあります。若者は、ソーシャルウェブが自分の対人関係を完全に満たしてくれるという錯覚にとりわけ陥りやすく、彼らが、社会から完全に引き離される危険のある「ひきこもり」になるという深刻な事態まで起きています。こうした劇的な動向は、かかわり合いから成る社会構造に深刻な断絶、無視できない亀裂があることを物語っています。

この油断のならない多面的な現実は、倫理、社会、司法、政治、経済の在り方にさまざまな問題を投げかけ、教会にも課題を突きつけています。各国政府は、自由で、開かれていて、安全であるという、ネットワークの本来の姿を維持するための法的規制を模索していますが、わたしたち皆が、その有益な活用を推進する役割と責任を担っているのです。

相互理解を深めるには、接続回数を増やすだけでは不十分であることは明らかです。それでは、オンラインのネットワーク上でも互いに担うべき責任への自覚に基づく、共同体の一員としての真のアイデンティティを見いだすには、どうしたらよいでしょうか。

「わたしたちは互いにからだの一部なのです」

その答えは、からだとその部分という第三の隠喩から引き出すことができます。それは、聖パウロが人間の互恵関係を表現するために用いたことばであり、各部分が一つとなって有機体を形作っていることに基づいています。「だから、偽りを捨て、それぞれ隣人に対して真実を語りなさい。わたしたちは、互いにからだの一部なのです」（エフェソ4･25）。互いにからだの一部であることは深遠な動機であり、使徒パウロはその動機のもとに嘘を退け、真理を語るよう呼びかけています。真理を守る責務は、交わりの相互関係を否定しないという要求から生じます。真理はまさに、交わりにおいて明らかにされます。それに引きかえ嘘は、自分が一つのからだの一部であることを、利己的に拒絶することです。自分自身を他者に差し出すことを拒むことにより、自分自身を見いだす唯一の道を見失っているのです。

からだとその部分の隠喩は、交わりと他者性に根差す自らのアイデンティティについて省察するよう導きます。キリスト者としてわたしたちは皆、自分がキリストを頭とするからだの一部であることを自覚しています。それによってわたしたちは、競争相手になりうる存在として他者をとらえるのではなく、敵であっても人として考えられるようになります。自分自身のことを明らかにするのに、敵はもはや必要ありません。すべてを包み込むまなざしをキリストから学んだわたしたちは、かかわりをもち、親しくなるために欠かせないもの、その条件として、他者性を新たな視点でとらえることができるからです。

人々の間で理解し合い、コミュニケーションをとるこの能力は、神のペルソナの愛の交わりに根ざしています。神は独りでおられるかたではなく、交わるかたです。神は愛です。ですからコミュニケーションが成り立ちます。愛とは絶えず伝えるものですから、神は人と出会うために、ご自分を伝えてくださいます。わたしたちと話を交わし、わたしたちに伝えるために、神は人間のことばにご自身を当てはめ、歴史を通して人類と比類のない真の対話をしておられるのです（第二バチカン公会議公文書『神の啓示に関する教義憲章』2を参照）。

交わりであり、ご自身を伝えるかたである神の像と似姿として造られているからこそ、わたしたちは交わりながら生きたい、共同体に属したいという願いをつねに心に抱きます。聖バジリオが言うように、「互いに交わりを結び、相互に依存し合うことほどに、わたしたちの自然本性に固有なことはないから」(注3)です。

この現状にあってわたしたちは、関係を築くために尽力し、互いにかかわり合うという人間の本質を、ネット上においても、ネットを通じても確認しなければなりません。とりわけわたしたちキリスト者は、信者としてのアイデンティティに刻まれている交わりをはっきり示すよう求められています。まさに信仰それ自体がかかわり合いであり、出会いです。わたしたちは神の愛に後押しされて、他者というたまものとかかわり、その人を受け入れ、理解し、こたえることができるのです。

三位一体の交わりはまさに、個とペルソナとの違いを明らかにしています。三位一体の神を信じているからこそ、わたし自身であるためには他者が必要となるのです。他者とかかわり合って初めて、わたしは真の人間、真のペルソナとなります。ペルソナということばはまさに、他者のほうを向き、他者とかかわる「顔」として、人間を表しています。わたしたちのいのちは、その性質が個的なものからペルソナ的なものへと移行することにより、人間性において成長します。人間性を深める真の道のりは、他者を競争相手とみなす個的存在から、旅の同伴者とみなすペルソナ的存在へと向かうものです。

「いいね！」から「アーメン」へ

ソーシャルウェブの活用は、相手の肉体、心、目、視線、息を通してなされる生身の本人との出会いを補完するものであることを、からだとその部分のたとえは思い起こさせてくれます。そうした出会いの伸展と期待のために用いられるなら、ネットは本来の姿を失わずに、交わりに資するものであり続けます。家族が互いの結びつきを強め、食卓を囲んで見つめ合うために用いられるならば、ネットは一つの資源です。教会共同体がともに感謝の祭儀をささげるために、ネットを通してその活動を調整し合うのであれば、それは一つの資源です。自分から物理的に離れたところで起きた、素晴らしい、もしくは苦しい出来事や体験に近づく機会となるなら、また、ともに祈り、自分たちを結びつけるものを

再発見することにともに善を見いだす機会となるなら、ネットは一つの資源です。

ですからわたしたちは、診断から治療へと移行することができます。対話、出会い、笑顔、触れ合い……、そうしたことへの道を開く、これこそが、わたしたちが求めるネットワークです。わなにかけるためではなく、解放するため、自由な人々の交わりを守るためのネットワークです。教会そのものも、聖体の交わりによって織りなされるネットワークです。教会の一致は、「いいね！」にではなく、真実に、各自がキリストのからだと一つになり他者を受け入れることを表す「アーメン」に基づいているのです。

注1. カトリック中央協議会のURL（https://www.cbcj.catholic.jp/2019/05/07/18950/）より。
注２．　この現象を食い止めるために、「ネットいじめに対する国際監視機関」がバチカンに設立される予定です。
注３．『修道士大規定』第三問1、PG31、917（桑原直己訳、『中世思想原典集成2――盛期ギリシア教父』平凡社）。教皇ベネディクト十六世「2009年第43回世界広報の日メッセージ」参照

７月のガラスケースのことば

あなたは行って神の国を言い広めなさい

ルカ　9-60

報告　納骨室認可完了

評議会議長

６月10日月曜日、「墓地の工事完了検査結果について」池田市から通知があり、池田教会納骨室は「支障なし」、とのお墨付きをいただきました。「墓地等経営許可証」はさきに交付済みでしたから、今回の通知によってカトリック池田教会納骨室を池田市が名実ともに正式認可したことになります。これまでさまざまな形で御協力いただいたみなさまにお礼もうしあげます。ノノイ神父さまは言うに及ばず、御受難修道会日本管区長山内神父さま、染野神父さま、事務局堤さま、また収支決算報告書関連でご苦労をおかけした財務担当委員の方々、ありがとうございました。

納骨室をめぐっては、これまでややもすると微妙な配慮を必要とする事情がありましたが、いまはそれも雲散霧消、短期的には安定した運用が可能です。現在、未使用の「部屋」が２０近くあります。申し込みをお引き受けできるようになりましたので、ご希望があればお申し出ください。

ただし長期となると楽観はできないのを、この場を借りてお伝えします。連絡のとれないご遺族がこのさき、さらにふえてゆく恐れがあります。そうなった場合、連絡先不明のまま残されたご遺骨をどうお世話するのか、教会としての課題となりそうです。時間をかけながら納骨室運営体制を、いっそう充実したものとする必要がある、と個人的には考えています。

ご報告いたしました。

2019年度年次信徒総会の一コマ

報告 大人の日曜学校だより　５月２６日

「わたしを愛する人は、わたしの言葉を守る」
（ヨハネ14：23－29）

“わたしを愛する人は、わたしの言葉を守る”。この週の心にとまったこの言葉、これは何を意味するのでしょう？ここでは「愛する」はギリシャ語のアガペー（αγαπη）すなわち“love”の動詞形、そして「言葉」はロゴス（λόγος）、すなわち英語の“word”や“reason”という意味の単語が用いられているようです。

では、“わたしの言葉”の“言葉”は、一体何にかかっているのでしょうか？おそらく、それは“イエスご自身が語られた言葉すべて”ではないでしょうか。そう考えると「わたしはイエスを愛しているのだから、イエスのみことばすべてを守らなければならない」ということになります。でも、私たちは実際にふだんからそうしているかというと、あるいは「そんなことを考えだしたら大変だ」というのが正直なところかもしれません。

そこで私の場合、もう少し柔軟に「イエスのみことばの中で自分が好きなものって何だろう？」そんなふうに思いをめぐらすことにしています。その中で、私がとくに好きだと感じるみことば、それは「人はパンだけで生きるのではなく、神の口から出るひとつひとつの言葉によって生きる」（マタイ４：１－４）です。そして、この「人はパンだけで生きるのではなく」という部分を、しばしば自分にも当てはめて考えてみることがあります。

“人はパンだけで生きるのではない…”。例えば、自分がなにがなんでも大切にしているもの、もしくは失っては困ると思っているもの、それを“パン”に置きかえてみるとどうでしょう？お金、地位、名声、もしかすると、大事にしている写真や時計とか…なんでもかまいません。そうやって、「これがなくては生きて行けない」そう思い込んでいるものに、いつの間にか囚われてはいないだろうかと、自分自身を省みるのです。そして、自分にむかってこう語りかけています「人はパンだけで生きるのではない」と。

この日の大人の日曜学校では、自らが迷いの中にあるとき、どうしてもなくてはならないもの、それはやはり「イエスのみことば」であると気づかされる意見もあって、短い時間でしたが、そのことをわかち合うことができました。

研修委員会

みんなの談話室　（六編の投稿）

ドレミの会は箱舟

ドレミの会　むらしま

ドレミの会の中心的な精神である「知的障がいのある人、発達障がいを持つ人も持たない人も共に過ごすコミュニィティー・ラルシュ・インターナショナル」の創始者である、フランス人のジャン・バニエ氏が90歳で亡くなりました。ラルシュとは、フランス語で《箱舟》という意味です。聖書の、選ばれた人や物が乗り込んだ「ノアの箱舟」から来ているのでしょうか？

彼は裕福な家庭に生まれ育ち、高等教育を受け、権力と地位に恵まれた日々を送っていました。その彼が世の中で忘れられがちな人たちの中に入り、へりくだり，共に過ごすことで、人が愛し愛されることの大切さを伝え、キリストの賜物を育て、「彼ら」は同じ「私たち」であることを伝え続けて、「ラルシュ」は国際ネットワークに広がっていったのです。

同じ精神で出発した「東条湖の家」のスタッフも世の中から見捨てられ、愛されるということを知らず、一人孤独な世界に生きてきた障がい者を受け入れ、24時間、家族として愛し共に生活することで、彼らに笑顔を取り戻させ、安定した心を与えています。

「ドレミの会」はそこまで深くかかわる時間ではありませんが、彼らと共に過ごす時間は、スタッフや友人にとってかけがえのない、楽しいひと時です。集まってくる彼らもありのままの姿を現し、お互いを認め合い、スタッフは彼らに与えているのではなく、お互いに人としてつながりあっていることを感じます。そして彼らは言います「せんせい、ここならあんしん！！」と。それは何を表しているのでしょう。世の中に出ると、すべてに遅い、うまく表現ができない。人としては皆と変わらない、高い心を持っているのに～彼らが傷つくことが沢山あるということです！

長いこと「ドレミの会」にきている一人の少女が、ある日「せんせい、私のお母さん大きらいや！私がうまれて、しょうがいとわかると、わたしをすてて出て行ったんやで!　ゆるさへん！」強い口調で言ったのです。わたしは返す言葉もなく、彼女が長い間、心に秘めていた口惜しさ寂しさを思い、涙が出そうになりました。頭をなでて「なにか訳があったのかもしれないよ！おかあさんは絶対あなたのこと忘れてないよ～いままで頑張ってお父さんの世話をして過ごしてきたんだから！あなたはえらかったよ！！」と言って慰めました。彼女は長い月日、知的障がいがありながら、入退院を繰り返すお父さんを看病して過ごしているのです。

ところが今年の母の日の後「せんせい、わたしお母さんに、プレゼントしたんよ」というのです。「ええ！すごいね～ゆるしてあげたの」と言うと「しょうないやん、お母さんやもん」と照れたようにいうのです。私は思わず抱きしめて「仲直りできたの、良かったね!　先生もうれしいわ～」といいました。でもここに来るまで20年近い月日がたっているのです。彼女の心に、お母さんを受け入れる愛のきっかけを神さまがお与えになったのだと思いました。

ドレミの会という≪箱舟≫に６月も船が沈みそうになるほど、たくさんの人が集まり、笑いあい、歌い踊り楽しい時間を過ごしました。7月もきっと箱舟は満員になることでしょう！なぜって、そこには「愛」がいっぱいあるから！

≪箱舟≫なんと温かなことばでしょう～

ガレージセール

「東条湖の家」のお店で

Y.N.

ガレージセールに「東条湖の家」の仲間が出品者、売り子として参加してくれました。「東条湖

の家」のお店にはパスタ関連の商品、ジャムなどおいしそうな品物がいっぱい。ひときわ目を惹いたのは、さいとうさんがひと針ひと針、丁寧に縫い上げた布巾です。白い布巾に青色の糸で古典的な模様を浮き上がらせています。そして、おおのくんの描いたポスターがお客様を招いていました。カレーパンマンやおばけくんや飛行機が紙面いっぱいに描かれた、愉快な絵でした。

ジャン･バニエ、Jean Vanier、の本

大野

「コミュニティー　ゆるしと祝祭の場」(佐藤仁彦訳、一麦出版社、1989年)の最初の章にはこんな言葉があった。「コミュニティは、人が「所属し」、こころが「開かれる」場であり、一人ひとりへの愛の場でもある。別な言葉で言えば、コミュニティは次の三つの要素で定義できるといえるであろう。一人ひとりを愛すること。共に結ばれていること。使命を生きること。」　著者は多くの人と結ばれていた。

教皇フランシスコと死刑廃止

大山

教皇フランシスコが来日される日程が、ほぼまとまったと、新聞に載っていました(朝日６月15日付け朝刊)。今秋11月２３日を軸に3泊４日。東京ドームでミサを立てられ広島、長崎を訪問されるそうです。

教皇様が来日されるのは二度目。前回は、今から３８年も前のことで、お迎えしたのは、故人となった聖ヨハネ･パウロ二世です。この方も広島･長崎を訪問。

当時、わが池田教会でも、ちょっとしたフィーバーがあったようですね。広島に来られた教皇様にまみえるため、教会から大型バスが出動したのです。私自身は当時、働きづくめ。社内の工場で汗と脂に塗れていました。だからフィーバーにも全く、我関せず焉。ただ、教会学校に行っていた子供たちが母親に言いました。「教皇様と会うため広島に行くので、学校には休むように連絡しておいて」。この申し出に、両親だけではありません。学校でも、先生、級友とも非常な驚き。少し後になると、笑いを誘ったそうです。

このバス旅行の様子を聞こうと、教会の年配の方々に尋ねたのですが、４０年近くも前の話。代替わりしてほとんどご存じなし。ただ８０歳を過ぎたお二人の方から、記憶おぼろげながら、次のように伺いました。

まず大型バスはほぼ満員。広島に着くと、会場もほぼ満員。平和記念公園で、教皇様が通られる道の沿道から、信徒たちが手を振り、池田から来た参加者の中には、教皇様から握手して頂いた人も。これは未曾有の僥倖でしたね。また別の人は「外国人が厚かましく、群衆を押し分け押し分け、教皇様に近づいてカメラをとりまくっていた」と回想。日本は当時はまだ差別意識が強かったのでしょうか。

また当時、広島のカテドラルに所属、今は池田教会の重鎮になっておられる方は「カテドラルで人の整理をしていると、関西から大勢押しかけてきた連中が柄悪くも大騒ぎ。ひんしゅく物でしたわ」。まあ、池田の信徒がそうでなかったことを祈るものです。

ところで私はヨハネ･パウロ二世来日に関して、係わりを持つことが出来ませんでした。多忙を極めた生活の故ですが、やむを得なかったとはいえ、今になって何か大きな損失を被った、と反省しています。

聖教皇がテレビで広島平和アピールを朗読。訓練された日本語で「戦争は人間の仕業です。…戦争は死です」と言われたお声、漫然とお迎えした私にも、強く心に残っています。そしてこれらのお言葉は、８月の平和旬間で繰り返され、今でも被爆者がたびたび、言及するところです。

教皇様はキリスト様の代理者。そんな方に直接まみえるのは、信徒にも霊肉のお恵みがもたらされるに違いありません。それはしばしば、第一印象の時に感ずるオーラとともに与えられるのかも知れません。

今回来日される教皇フランシスコの場合は、もう少し密接に関わってみたいと思いました。勿論、東京や広島に行くなんぞは、体力的にも経済的にも無理。では、どうするか。教皇フランシスコの教訓を、出来るだけ忠実に実行する。来日される前までに根気よく続ける。こうすることで、来日された時、霊肉のお恵みがいただけるのではないか。

では何を実行するのか。思い付いたのは教皇フランシスコが、昨年の夏、死刑廃止を定められたことです。「カトリック教会のカテキズム」の内容を変更されたのです。

それまでカトリック教会は、死刑について「やむを得ぬ場合は認める」という立場でした。「カトリック教会のカテキズム」 2267番に次のように述べられ

ていました。

「教会の伝統的な教えによれば、違反者の身元や責任が完全に確認された場合、それが不当な侵犯者から効果的に人命を守ることが可能な唯一の手段であるならば、死刑を科すことも排除されていません。」

ところが教皇フランシスコは、この文言を次のように改められました。

『‥死刑‥‥2267　合法的権威がしかるべき手続きを経た後に死刑を科すことは、ある種の犯罪の重大性に応じた適切なこたえであり、極端ではあっても、共通善を守るために容認できる手段であると長い間考えられてきました。

しかし今日、たとえ非常に重大な罪を犯した後であっても人格の尊厳は失われないという意識がますます高まっています。加えて、国家が科す刑事制裁の意義に関して、新たな理解が広まってきています。最後に、市民にしかるべき安全を保障すると同時に、犯罪者から回心の可能性を決定的に奪うことのない、より効果的な拘禁システムが整えられてきています。

したがって教会は、福音の光のもとに「死刑は許容できません。それは人格の不可侵性と尊厳への攻撃だからです」と教え、また、全世界で死刑が廃止されるために決意をもって取り組みます。』（カトリック中央協議会のHPより）

これって日本人にとっては、かなり大変なことのようです。たとえば我々の近所で起こった「付属池田小事件」。1，2年生の児童８人が殺害され15人が重軽傷を負いました。犯人は既に死刑に処せられました。カトリック信者の多くは、「あれだけ残忍な犯罪を犯したのだから死刑もやむを得ない」というマインドを持っていたでしょう。ところが去年の夏以来、このようなマインドを持つことは許されなくなりました。教皇フランシスコが、上記のようにカテキズム本文を変更なさったのです。信徒は「どんな凶悪な犯人に対しても、死刑は望むべきではない」と考えなければならないのです。

ところで、このマインドの変換、信者のみならず、一般国民にも要請されるようです。ウイキペディアによりますと、死刑が廃止されているのは、世界の大勢です。EUを主体とするほとんどの欧州先進国。ロシアも実施が凍結されています。アジアでは、フィリピン、カンボジヤ、ネパール、ブータンは廃止。お隣り韓国でさえ凍結状態です。

そして世界で最も死刑の多い国は中国だそうです。故意の殺人のみならず覚醒剤、放火、賄賂なども死刑の対象に。どうも死刑制度が残っている国は、なんだか野蛮な印象を与えますが、我らが祖国日本も、その中に入っているのです。

カトリック日本正義と平和協議会（正平協）は、昨年サリン事件の麻原被告ら7人に対して死刑が執行されたことに対して、法務大臣と総理大臣に抗議文を送っています。死刑に対する日本人全体のマインドを変革する必要があるようです。

仮に信徒の子息が、付属池田小学校に通って、暴漢に刺殺されたとします。カトリック信徒としては、彼に刑罰として死刑を要求する権利はない。そのように考えるべきではないでしょうか。自分が真のカトリックでありたい、と望む限り……。極めて困難ですが、キリスト様はお命じになりました。「敵を愛し、自分を迫害する者のために祈りなさい。あなた方の天の父の子となるためである。父は悪人にも善人にも太陽を昇らせ、正しい者にも正しくない者にも雨を降らせてくださる」（マタイ5・44から）。

死刑制度を廃止しても、凶悪犯罪が増えるわけでもないようです。死刑廃止は、教皇様の強力なご指導です。私たちが真のカトリック信者になりたいのであれば、力を尽くして教皇様に従うべきでしょう。

そこで来日されるまで後三、四ヶ月あります。その間、出来るだけ黙想に励んで、死刑廃止にマインドを変えるように努力しようと思っています。

短歌二首

這うように空中をゆくモノレール
茜に染まる雲の手前を

昨夜（きぞ）のあめ根から幹へと流れつつ
向かう梢のさきに陽光

パウロ

（みんなの談話室は次ページの左欄へ続く）

みんなの談話室　前ページより続く

サイコロの会で大道芸

K.S.

６月１２日（水）のサイコロの会で、奈良教会のセミプロ大道芸士、鈴木さんの芸を見せて貰いました。目を見張っている間に３０分があっという間に過ぎていました。「おー！」「わー！」の連続でした。もっと沢山の人に見てもらえたら良かった。

宝塚黙想の家から黙想会のお知らせ

■　日帰り黙想会

７月２５日（木）10:00～15:30
指導：山内十束神父

７月２６日（金）10:00～15:30
指導：山内十束神父

■　週末黙想会　7･8月はありません。

各黙想会、費用等のお問い合わせは「宝塚黙想の家」まで。　☎0797（84）3111

地区委員会から

教会の備品を借りられた方は、使用後はお忘れにならず、返却をお願いします。

表紙の写真について

教皇の日本訪問を伝える記事，（www.christiantoday.co.jp　２０１９年５月２日）、にあった教皇の近影。

年間カレンダーに追加された行事予定（７月３０日まで）

７月４、11, 18日（木）10:30　～　聖書百週間
７月12、２６日(金)　14:00～16:00（予定）
福音書を学ぶ会

編　集　後　記

本年度の信徒総会で、耐震補強工事をするという大きな決定が下された。ほぼ確実に来ると言われている大地震には、できるかぎりの備えをしなければならない。補強工事後は、もし聖堂にいるときに、大地震が起こったとしても、とりあえず、堂内にとどまっていれば、屋根や照明やガラスが落ちてくる恐れも少なく、安全となるのだろう。これまで長年にわたって信徒一人ひとりがささやかながら献金してきたので、費用のねん出に困ることはない。ありがたいことである。何よりもイエス様の宿られる、祈りの場所を守れる見通しがついて、喜ばしい限りだ。願わくは、補強したあともさほど外観が変わりませんように。

ソフィー